

登録有形文化財

畑田家住宅活用保存会年報

No.10/2011



梅 (庭の植物シリーズ6)

Sadao N.

<畑田家住宅活用保存会 2011 年度行事予定>

第 14 回畑田塾 2011 年 5 月 15 日

「お能ってなあに？」

能楽師 山本博通

「子供の遊びを考える」 畑田家住宅活用保存会

畑田耕一、畑田勇、矢野富美子
吉山輝、蒲池幹治、大西麻容

秋の一般公開とフォーラム 2011 年 11 月 20 日

「高齢化社会を生き抜くには」

医療法人はただ診療所前理事長・医師

畑田耕司

第 15 回畑田塾 2012 年 3 月 25 日

「オルゴールを科学する」

畑田家当主 大阪大学名誉教授

畑田耕一

「いろんな音でリズム遊び」

関西二期会 相愛大学講師

畑田弘美

春の一般公開と医学フォーラム 2012 年 5 月 13 日

「いのちの不思議」

元大阪大学総長・大阪大学名誉教授

岸本忠三

農業生産物の出荷は、農家にとっては大きな楽しみであります。早朝より家族一同が協力して出荷の準備をいたします。時期がくると、地元の仲買人が生産品の買付けに回ってきます。荷物が少ないときは仲買人と交渉して売ります。荷物が揃った時は自ら市場へ出荷いたします。荷物を肩引車に積んで、少々遠くても市場へ出荷します。父が市場へ出かける時、車の後押しをしたり荷物を整理したり、ついて行きます。小学生の頃は、途中色々な体験をすることが出来ました。堺の「七道の市場」まで行ったことがありました。堺まで西へ約三里の道程をテクテクと歩いて行きます。途中疲れると荷物の横に乗せてもらいます。長い長い道程です。これが昔から人々が盛んに往来していた竹内街道だったのです。

伯母の縁談が整って、父は嫁入り道具の準備をする為に堺の間屋まで買いに行くことになりました。行く時は農産物を出荷し、帰りに家具問屋で嫁入り道具を買い整える計画をしました。堺には色々な道具問屋があってよい品を安く購入でき、また長年の信頼があって安心して買うことが出来ます。特に刃物は有名で、日常重宝する道具類や農具等は定評があります。荷物が多い時は、牛に車を曳かせて竹内街道を道中いたします。

祖母の里が藤井寺で、約28丁を周りの景色を楽しみながらよく連れてもらいました。特に春の羽曳野丘陵地帯は桃の花が一面に咲き素晴らしく綺麗です。“今日は花見休みやデー”のふれこみがあって、各家族で思い思いに弁当を用意して、賑やかに花見を楽しんでいました。一月九日は、西国33ヶ所第5番札所の葛井寺観音様の縁日(千日参り)で、境内一面に出店があって賑わいます。ゲームや食物店が多く「たいこ焼き」や「こぼれ梅」等が目につきます。ご本尊の「千手観音様」を拝んだ時、子供心にも不思議な気がしました。夜には藤井寺球場で花火大会があって、打ち上げ花火や仕掛け花火に圧倒され、大いに興味と興奮を感じました。

昭和12年春、憧れの富田林中学校に合格が決まった時の喜びは一入でした。編上靴を履いて、鞆には教科書を一杯詰め込み菊水の校章を帽子につけて、颯爽とした姿は少なからず優越感を覚えました。通学は隣家の友人と一緒に、古市駅まで竹内街道を東へ約一里徒歩で行き、富田林駅まで約15分の電車通学をしました。沿道には、御陵や古墳が多く通過する時は必ず立ち止まり、脱帽して敬礼致しました。一年生の二学期からは平尾山を越えて自転車通学することになり、卒業まで約5年間雨の日も風の日も、早朝の寒稽古や土用稽古にも精出して、約5年間皆勤で通学いたしました。その間校訓の「楠公精神の高揚」を目標に、諸々の行事や訓練に参加し大いに鍛えられました。これらの事は、私の人生にとって最大の修業経験であり、生涯を通じて私の人間形成に多大の影響をもたらしました。

1. 絵画フォーラム 5月23日
「見たものを描く喜び」
新制作協会会員、宝塚大学講師
中村貞夫
2. シニア科学塾 in 宝塚の畑田家住宅見学と
オルゴールコンサート 10月17日
3. 秋の一般公開と教育フォーラム 11月14日
「これからの教育—変えねばならないこと、変えてはならないこと」
羽曳野市教育委員会教育室長 戸川好延
羽曳野市立西浦東小学校長 安部孝人
羽曳野市社会教育課参事 吉澤則男
前羽曳野市高鷲南中学校長 久堀雅清
前羽曳野市立古市小学校長 疋田和男
前羽曳野市立丹比小学校長 山本 清
大阪府立春日丘高等学校長 栗山和之
梅花学園入試担当 大友庸好
フランス国立科学研究センター名誉研究員 関口 焔
大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授 池田光穂
畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田耕一
4. 畑田家見学会 2月7日
羽曳野市立丹比小学校4年生 140名
5. 第13回畑田塾 3月20日
「私たちの四季、音楽とガラスの世界に学ぶ」
ヴァイオリン 木野雅之
ピアノ 吉山 輝
ガラスアート 畑田美智子
6. 出版
「お茶と日本人の心」(出版シリーズNo.8)
武者小路千家第14代家元 千 宗守

役 員

会 長	畑田 勇
副 会 長	甲斐学、中村貞夫、畑田拓男
事務局長	畑田耕一
幹 事	石井智子、奥田 寛、織川久子、 笠井敏光、畑田弘美、矢野富美子
会 計	畑田庸雄
会計監査	澤田秀雄、塚本昭光

新正会員

大西麻容	小野里志		
------	------	--	--

新特別会員

安部孝人	池田光穂	大友庸好	久堀雅清
栗山和之	関口 焔	戸川好延	疋田和男
山本 清	吉澤則男		

<梅>庭の梅が一輪咲いた。老木なのだが春分の日に合わせて開いたのが嬉しい。柔らかい香りを楽しむ。(中村貞夫)

本年の行事に参加していただいた方々からの感想文

第12回畑田塾（2010年3月21日）

「クモの糸の不思議」奈良県立医科大学教授大崎茂芳

「畑田家を探検してみよう」畑田家当主 畑田耕一

一級建築士 石井智子

◆第12回畑田塾に小学校5年の息子を含む家族3人で参加させて頂きました。羽曳野の田園集落の一角に、一際目を引く長い土塀に囲まれたお屋敷が「畑田家住宅」でした。当主の畑田先生に招かれ、土間からかなりの段差のある表玄関へ上がると、その先に仏間と居間の仕切りを取り払ってできた14畳程の部屋が広がり、人々が集まっていました。襖を開閉し、自在に好みの広さの空間を作り出せるのも伝統的な日本の家屋の知恵であると伺いました。

さて、いよいよ今回の畑田塾のテーマ、大崎先生による「クモの糸の秘密」です。時折、説明が「学会風」になりかけると、畑田先生が「チョット待った！」をかけ、参加者も次々に質問を投げかけて、互いに理解を深めていこうとする雰囲気の中、この会は進んでいきました。この様な、相互の意思疎通はどのような場においても大変大切であると思います。

もう一つ、最近の大学などの研究と言うと、研究分野が極度に細分化され、中身もより専門化して門外の人にとってとかく理解しづらいものになりがちです。自然は「不思議」に満ちています。今回の「クモの糸」のように、ちょっとした身の回りにある不思議な出来事を見つけ、あれこれと自分なりにやってみて、その謎を少しずつ解き明かしていく過程に、本来の科学の面白さがあるのではないのでしょうか。

季節柄、クモが辺りに見当たらないのが残念でしたが、次回はぜひ、クモの糸を巻き取る工夫や、「カンダタ」よろしくヒトがクモの糸にぶら下がる姿を実演して見せて頂きたいと思います。豊かな空間で豊かな時間を過ごさせていただき、有難うございました。（西澤誠二）

◆3月に僕は、畑田家住宅で行われた畑田塾に行きました。初め、大崎先生に「クモの糸の不思議」についてお話をうかがいました。僕は、クモに関心があり、ナガコガネやタカアシグモなどを飼っています。特にクモの糸について興味があるので、今回のお話を前々から楽しみにしていました。先生のお話では、糸の成分や強度など、クモの知られざる秘密について聞いたり、気軽に質問することができ、とてもうれしかったです。特に、命綱に2本のフィラメントを利用するクモの知恵にはおどろき、感心しました。「クモは体の中でどのようにして糸を作っているのか」という疑問についても分かりやすく教えてくださいました。

さらに、お話の後にも先生にいろいろ教えていただいたことが心に残っています。今年は先生に教えてもらった観察ポイントなどにぜひとも注意してクモを飼ってみたい

です。

午後は、畑田家住宅の探検でした。その中でも僕が心をひかれたのは、柱どうしの組み方でした。どのような組み方があるのかたずねてみると、先生方が実際に模型を見せながら、その組み方の種類についてくわしく教えてくださいました。

最後に畑田先生より、修了証書と記念のオルゴールとバッジをいただきました。オルゴールは、家に帰ってから机に押しつけて回すと、「赤とんぼ」の良い音色が聞こえてきました。また、畑田先生のお家でお話を聞きたいです。本当に有難うございました。（小学校5年 西澤哲朗）

◆畑田塾、初めて参加させて頂きました。久しぶりに大学の先生の講義を受けましたが、とても面白かったです。テーマが「クモの糸の不思議」だったからでしょうか。興味深い内容でした。大崎先生がクモを追いかけて、世界中を旅されての研究はさすが大学の先生だなあと感心するばかりです。そして、クモの糸でブランコをつくり強さを実験するという発想、これまた面白かったです。先生は奈良医科大学教授ですよ。全く「クモ」と関係がない???

それから畑田家の探検これもまた勉強させて頂きました。畑田先生並びに一級建築士石井先生の解説でよくわかりました。昔の人が考えられた生活の知恵、間取り、天井、床、縁、柱、はりすごいですね。子供達の将来を考えての想像力を養う為の畑田塾の開講は素晴らしい試みですね。私も、このような大きなことは出来ませんが、「紙芝居」を通じて近所の子供達にメッセージを伝え、想像力をつけるチャンスを作ってあげようと思いました。本当にいい勉強のチャンスを頂き有難うございました。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 上杉正輝）

◆蜘蛛の不思議な生態も興味があったのですが、家の方にも大いに魅力を感じました。家にはそこに住まう人々が営々と築いてきた歴史があるからです。太い梁や高い天井の中で、生まれ、育ち、やがて死を迎える、畑田家では家族だけではなく大勢を抱え、さまざまなドラマがあったのだろうと想像しました。欄間は続きの部屋の明かりとりかと思っていました。物騒な事態を想定した控えの間でもあったのです。時代劇で見るとような場面が実際にあったのかもしれない。本当に有意義な時間でした。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 小森幸子）

◆畑田家探検が約60年前の実家での情景を呼び起こした。それは確か昭和27年8月の盆、田の字型になった6畳4間の戸や襖は全て取り外され、老若男女が団扇で暑さを凌ぎながら座敷音頭（浪花節＝浪曲）を楽しんでおり、その中に12歳の私もいた。私の浪曲好きはこの時の体験に因るのかも知れない。戦後7年まだまだ娯楽の少ない時代、村で盆に催される江州音頭や座敷音頭は村人には楽し

みであったのだ。

実家は滋賀県の南部に位置し、当時村の風習として、厄年（男は25歳、42歳、女は19歳と33歳）に当たる者が中心となり、厄除けに村人に娯楽を振舞ったのである。1日目は、夜、天満宮の境内に櫓を組み立て、江洲音頭の音頭取りが歌う声に合わせて櫓の周りを踊る。翌日はお昼に座敷音頭となる。わが家で行なわれたのは、その年は父が唯一人の42歳の厄年であったからだ。余談ながら、子供心に、てきぱきと行事を練り進める父に、男が42歳ともなれば、こんなにも立派になるのかと尊敬心を抱いた。日本は“縮みの文化”だそうだ。それは扇子や風呂敷に見られるのだが、使わない時は小さくしておき、必要に応じて広げる文化で、それが家の造りにも及んでいる。普段は襖や簾障子（夏と冬には入れ替える）でスペースを小さくして使い、行事に応じて広げるのである。畑田家で「座敷音頭」が再現できないかと、ふと思ってしまった。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 池上和彦）

◆古民家を見るのは好きです。当時の暮らしぶりを想像する楽しみもあります。博物館の様な人の住んでいない家は整然とはしていても孤独な建築物です。でも、畑田家には暮らしがありました。田の字形の間取りは襖をとり払うと大広間になり、いろいろな集會が開かれたり、祝儀、不祝儀も行われたのだらうと思いをはせました。高い天井と太い梁、かと思うと、廊下の一隅に置かれた本箱には、古い本とカラフルなDiaryの背文字のある数冊の日記帳が並んでいました。食堂には代々の方の当時の正装の写真がありました。仏壇にオルゴールを置いて、「いい音でしょう」と音響を楽しむ畑田耕一氏はフレキシブルな方です。だからこそ、家を開放して日本の建築文化を後世に伝えたいと活動しておられるのでしょうか。都心の集合住宅に住んでいる私には懐かしく心やすらぐひと時でした。

ちなみに蜘蛛は一番苦手な虫ですが、お話を聞いて少しは親近感がわきました。故郷の家の障子をパラパラと動く夜の大きな蜘蛛を思い出しました。粘着力に注目の研究とは！学問を仕事になさる方は楽しい発見が次々とあって幸せでしょうね。平平凡凡と暮らしていますが刺激になった一日でした。有難うございました。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 秋吉幸子）

絵画フォーラム「見たものを描く喜び」（2010年5月23日）

新制作協会会員、宝塚大学講師 中村貞夫

◆スケッチブックを持って絵を描くことは、中学生以来です。まず、中村先生から絵を描くことは、被写体の第一印象を大切にすることであると教えていただきました。私は、被写体に仏間とオルゴールの人形を選びました。仏間は、畑田家住宅の玄関に入ると、最初に目にする部屋です。仏間を描くにあたり、奥行と年月を経た柱や壁を、長年住

み続けた人間のぬくもりを持たせながら表現することにポイントを置きました。オルゴール人形は、表と裏の表情が同時に表現できるので、横からの視点を選定しました。黄色を身にまとして外国から日本にやってきた人形を表現しました。（日本合成化学 浅野育弘）

◆畑田家住宅は文化財としての価値があるのはもちろんなのですが、昭和生まれである私にとっては何となく懐かしさの漂う佇まいで、心地の良い場所でした。絵を描いているときは、同じ屋根の下にいる小学生の活気ある気配に一すうきうきし、難しく思えた風景画も何とか仕上げるのが出来ました。

雨の音を聴きながら、外国の風変わりなオルゴールをいくつも見つめて、聞かせていただきましたが、少し現実から離れたところにいるような、そんな風にも思ってしまったひと時でした。印象深く貴重な一日を過ごさせて下さいました畑田家の方々に御礼申し上げます。

（主婦 吉岡慶子）

◆5月23日（日）昨夜からの雨。河内長野駅改札口11時30分集合、みな早くから来ておられる。10人タクシーに分乗して畑田家に向かう。先に何人かいらして。中村先生のアトリエを見せていただく。色の調合の見本を克明に作っておられるのに驚く。

玄関の靴脱ぎの横から梯子でつしに登ると、数十畳の土間で先生の絵が何枚もかかっているとのこと、何人か登って見ておられた。その後、いろいろな扇を散らした欄間のあるお座敷で、お心のこもったお弁当をいただく。隣の仏間で当主畑田耕一さんのお話、中村先生の、ピエール、ボナールの「第一印象を大切に」というお話をいただいた後で、畑田家のスケッチを始める。私は門の横の蔵の屋根が旧家にある棒瓦なので、主屋の廊下から庭とともにスケッチする。主屋は平瓦なので、修理のときに変えられたのかなと思う。みなそれぞれ描いた絵を耕一さんに写真を取っていただき解散する。畑田家の入り口に建物の由来を書いたもの、建物の間取りなどが展示してあると良かったと思いました。（中桐暢子）

◆朝から生憎の雨でしたが、白壁と黒瓦が濡れた畑田家は美しく、参加させてもらって良かったと思いました。日本の集落は整然とした美しさを持っていたはずですが、今では何のまとももなく雑然とした「何でもあり」の街並みになってしまいました。畑田家を含む集落一帯が街並み保存に取り組んで、この美しさを残してほしいものです。日本以外の国では、何百年もの間、同じ建物が内装を変えながら使われ続け、街は生き続けています。日本の古い家屋もそのように手を入れて住みやすくして維持出来たらよいのと思います。畑田家の土間や中二階、応接間、玄関など興味深く見学させていただきました。（高木章子）

この絵画フォーラムでの参加者の皆さんの作品は畑田家住宅活用保存会のホームページの文・随想欄でご覧いただけます。URLを下に示します。

<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun51DrawHATA DAHouse.pdf>

教育フォーラム「これからの教育—変えねばならないこと、変えてはならないこと」(2010年11月14日)

(パネラー) 戸川好延、安部孝人、吉澤則男、久堀雅清、疋田和男、山本清、大友庸好、栗山和之、池田光徳、関口焯

◆日本の学校では先生から生徒・学生への一方通行型の授業が多いという意見がありました。同感です。大学の授業でも、学生が先生に質問したり、意見を言うことは殆どありません。中国では、学生が良く質問するし、宿題も沢山出るので、先生と学生との対話が盛んです。自分の意見をしっかりとと言える学生を育てることが大事だと思います。根本原理の教育にもっと力を入れた方が良いという意見が出た時に、それは理想ではあるが実際は難しいと言った人がいました。私はそうは思いません。中国ではやっています。大学を出てからも勉強することの重要性が議論されていました。私も生涯教育が大事で、そのための完全なシステム作りを急ぐ必要があると思っています。

(大阪大学大学院理学研究科 王羅曼)

◆フォーラムで議論されたことの中で、私が興味を持ったことの一つは、学校教育と社会との連結です。大学入学や就職の時の判断の基準にされるのは専門科目と、いわゆる主要科目の成績で、それ以外の能力が試されることはありません。そのために大学や大学院の卒業生が興味の範囲の狭い人間になる傾向があります。でも、在学中に自分の専門以外の勉強をする時間がほとんどないのも事実です。対策として、生涯教育システムの充実が大事だと感じました。他の一つは、学校での双方向授業の問題です。日本の授業は、中国に比べると、双方向性に欠け、先生が一方的にしゃべっていることが多いと思います。これは先生が悪いのでも、生徒・学生が悪いのでもなく、「先生がそう言ってるのなら、しょうがない」といった雰囲気日本の社会が持っているからだと思います。

(大阪大学大学院理学研究科 袁厚群)

◆教育の最前線におられる10人のパネラーから学校教育の最近の問題点について、いろいろな観点からの説明と討論があり、参加者からも意見が述べられた。私は、「一人の不始末は一家の恥」、「そんな事をしたら笑われる」という恥の文化があった日本に、戦後、個人の都合だけで物事を処理する考え方が広がり、日本人の本質が変わってしまったところに問題の根源があると思う。家庭における教育力の低下は、一人親家庭や人間的に未熟な親が増えて、

親は子どもを養うために働かなければならず、その上、刺激的で面白く楽しい情報過多の中で親自身も遊びたい気持ちに流されたりして子育てをする時間の余裕が少なくなったり、あるいは、子供を虐待や愛玩の対象にした結果である。学校教育の分野でこれらの問題を解決するには、教員数の増加と学級当たりの生徒数の低減、放課後にも先生と生徒の接触の機会をつくり両者の関係を一層強める努力をすること、新任教員の研修をはじめいろいろな問題を学校全体で受け止め、話し合い、改善していく体制を作ることが必要と考えている。私が敬語について質問したのは、教える立場の先生と、教えて頂く立場の生徒との関係を、子供たちはどのようにして身に付けて行くべきなのかについての先生方のお考えをお尋ねしたかったためである。「親しき仲にも礼儀あり」、親しさと馴れ馴れしさは別物である。そういうけじめをどこで身につけたら良いとお考えなのかをお尋ねしたかったのだ。けじめと自覚は、今、とても大事なことだと思う。先生には、教育する立場のけじめと自覚をしっかり持って頂き、子供たちには教えて頂く立場というけじめを自覚させるために、日々の言葉での植え付けが大事だと思う。まず、形から入れば、次第にその形にふさわしい内容を備えた人間に成長することもあるのではなかろうか。人間は須らく対等でなければならないが、年齢、経験、地位など立場をわきまえた言葉遣いや仕種が必要であることは言うまでもない。教員経験の豊富な参加者の一人が、形より内容が大事だと事例を挙げてお話をされたが、こういう優しさや愛育もまた、変えてはならないことの一つだと思った。(八尾市 浅田幹子)

◆いろいろな現場の方の隠しだての無い率直な意見が聞けて、大変勉強になりました。池田光徳教授の意見は、視点が広く、私ども現場のものには新鮮で興味深かく拝聴しました。また、物事の根本原理の教育に関して、関口博士の哲学は哲理と呼ぶべきという意見には感銘をうけました。現場の人間はどうしても目先のことだけを考えた方策を取る傾向があるが、これからは、もっと先のことを考えねばならないことが良く分かりました。羽曳野市でも、学校の設備は確かに十分ではありません。ただ、幸いなことに、羽曳野市長が教育・文化関係の予算を削ることは滅多にありません。これからも必要な予算の増額を常に市長に訴える努力を続けたいと思っています。今日のフォーラムを終えて、人と交わる力と対話能力の修得、ならびに、社会に生きるための対応策を日常生活の中で考え、体得することの重要性を是非とも子供たちに伝えたいと思いました。(羽曳野市教育室長 戸川好延)

◆フォーラムのテーマに興味があり参加しました。読解力や表現力などで、日本は東南アジア諸国の後塵を拝している現状を打開するためにも、教育者に限らず、市民を巻き込んだフォーラムの意義は大きいと感じました。教育には、

知識の習得と器作りの両面があることを見直さねばならないと思っています。岡潔博士は、情緒の器のない、現在の記憶ばかりの勉強では、二十歳が限界と説き、美しい音楽を聴く情緒の器づくりの重要性を主張されています。今回のフォーラムが、科学者である畑田耕一先生の主導のもとで開催され、的確で多彩な人選と市民を結びつけられたことに、大いに得るところがありました。今後このような大切なフォーラムはシリーズ化され、継続してさまざまな

課題に触れ、大きな輪に発展させて頂きたいと思います。

(佐伯吉捷)

第13回畑田塾 (2011年3月20日)

2011 私達の四季、音楽とガラスの世界に学ぶ

ヴァイオリン 木野雅之

ピアノ 吉山 輝

ガラスアート 畑田美智子

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

古い建物の大切さ

石井智子美建設事務所 一級建築士 石井智子

人は、知らない間に、住まいから、いろいろな影響を受けています。住まいは人生においてとても大事なものであり、決して買うものではなく、作り上げるものだとことを沢山の人々に知っていただきたくて、筆をとりました。古い家は訪れる人々にやすらぎを与えてくれると同時に住宅の作り方のお手本としても非常に大事なものであり、一軒でも多くの古い建物が生き続けて欲しいと思っています。

遺跡が発掘されたり、古文書が発見されて、歴史は少しずつ書き換えられますが、これらと違って古い建物は、人が中に入って体験できる貴重な歴史資料です。たとえば、古い住宅である民家は、地域にある材料を使い、風土や生活に合わせて発展してきたもので、地域ごとにある程度類型化されていますが、それでもやはりその時代の思想や哲学を具現化しています。建物を訪れた人は、人それぞれに、意識するかどうかは別として、昔の人の哲学や思想を学び取っているのだと思います。そういう訪問者の大部分に共通するのは、落ちつけて、心が和んだという感想です。理屈を抜きにして、歴史のある建物には人の心を揺さぶる力があります。

古い民家と同じ構造・形の建物を今新しく作っても、感動が起きないことが多いのは、形を作ることができても、歴史を埋め込むことができないからではないでしょうか。何百年もの間の経年劣化をその都度修理して、何代にも渡って大事に使われてきて、その中で起こる悲喜交々のできごとをじっと見続けてきた古い建物の歴史は、長年の間に培われたものであり、一度潰されてしまうと二度と作ることはできない貴重な財産なのです。

古い建物の建て方は伝統構法と呼ばれ、太めの柱と梁、および貫(ぬき)を用いて、互いの部材を貫通させる構造形式で、細長い堅木である車知(しゃち)や込み栓(こみせん)を用いて接合部を固定します。阪神大震災で伝統的な建て方の建物が弱いかのように言われ、多少の被害を受けただけの建物が沢山潰されてしまいましたが、地震時の恐怖感から潰すことになったものも多く、中には建て起こして元に戻すことができた建物も随分ありました。震災後、建築界で木構造の研究の遅れが指摘され、実験や研究を経て伝統的な建て方の素晴らしさが解明されつつあります。ところが、平成17年に表面化した構造計算書の偽装事件、いわゆる姉葉事件がきっかけになった建築基準法改正によって、伝統構法では非常に建てにくくなり、現在の木造建築では、在来(軸組)工法と呼ばれる釘や補強金物で接合部を固定する工法や枠組み壁式工法(ツーバイフォー)と呼ばれる建て方で、建売住宅やプレハブ住宅に代表されるように、一定量以上の耐力壁を持ち、木材の接合部には金物を多用した建て方が標準になってしまいました。しかしこれも基礎がしっかり作られていなければ、地震時には建物ごと傾きます。どちらの建て方の家でも、構造設計がきちりなされ、設計図どおりに施工されて、竣工後維持管理がなされているかどうかが大問題で、マスコミで一時期言われたように伝統構法が弱いということではありません。

改めたいと思うことは、住宅が商品として扱われるのが当たり前のようになり、新しい住宅が、昔から培われてきた民家の文化を受け継ぐような方法で建てられることは殆どなくなり、多くの人々が、柱や梁の見えない壁の多い住宅に住むことになった状態です。柱や梁で構成された伝統構法の家では、木の温かさが伝わって来、沢山の大きな窓をとることができて、外の自然や庭と一体となった室内から四季折々の移ろいを感じ、細やかな感性を育むことができました。古い日本の民家は、自然の素材で作られており、シックハウスとは無縁で木目や土壁、瓦の風合いは時がたってもそれなりの美しさを保っています。周りに自然があり、家が人間の五感にとって魅力的な空間であることによって、感受性や創造力が豊かになるのではないかと思います。住宅は営利のみを目的として作るものではなく、人間の本来あるべき姿を考え、住み手にとっていかにすれば心豊かに暮らせるかを考えて空間を設計し、その建物の持ち主が変わっても何世代にわたっても住み続けられるような長持ちする建物ができるよう工事の監理をするのが、建築家の役割です。このことを多くの人々に知っていただけるよう情報を発信していかなければならないと思っています。

フランス方式の〈考え方教育〉を

フランス国立科学研究センター(CNRS)名誉主任研究員・元Pierre et Marie Curie(Paris 6)大学配属研究員 関口 焜
今はむかし、フランス政府の給費留学生としてパリ市立工業物理化学単科大学に着いたころのこと、研究室の慣習がわからないので「朝は何時から働くことになっているか」とか、「土曜日の午後にも実験をしないか」などと同僚フランス人の研究者に質問したところ、その返事が“Theoriquement, … (理論的には…)”と来るのでおどろいた。その後も研究のことなどで討論するとき、“Ce n’ est pas logique (それは論理的ではないね)”とあって反論されることがあった。(近ごろは日本でも“基本的には“とか“原則として“をよく聞くようになった。)

のちにフランスで40年間暮らしているうちに徐々にわかったことだが、フランスの生活の中には論理の観念が隅々にまで浸みわたっている。そして個々の論理が、まるで幾何学の証明のときのように幾つも繋がり幾段にも重ねられて、大きな構造物すなわち思考体系となって張りめぐらされている。この思考体系はフランス社会の共有財産であって、フランス人の生活も発想も行動もこれを元にして形成される。ひと口にいてフランス社会は理詰めの社会だ。

日本人とフランス人はその感性とか小器用さとかよく似た面もあるが、ものの考え方については全く正反対だ。日本人は知識を尊び実務・実用にすぐれ、応用・改良・技術に才能を持つ。これに対しフランス人は論理を信奉して合理精神を重んじ、本質論に長じる。どうしてフランスのような社会がつくられるのか、それは教育にあるようだ。フランスでは諸教科の中で一番重要なのは国語(すなわちフランス語)だという。人間は幼少時から物事を言語で理解し習得し、言語で考えて思考を整理し、言語で表現して意思を伝達する。

参考までにフランスの国語教育の概要を紹介しよう。まず、小学校(5年制)ではフランス語の読み書き・文法・綴字などの基礎的な学習をしながら、徐々に諸作家の文学作品に接してその解釈・感想・説明・鑑賞・要約のしかたを学ぶ。中学(4年制)では評論や批評のような意見作品も加わり解釈・要約のほか内容の分析と検討・意見・批評を練習する。○×式の設定はなく、全部記述形式で答える。国語は文系では高校(3年制)1年で終わり、2年間の哲学に引き継がれる。理系では国語が2年間、あと1年が哲学となる。

大学の入学資格国家検定試験として知られるBac(Baccalaureatの略)は高校2年終了時に一次試験があって、科目は国語だけ。これに合格しなければ二次試験を受験できない。再試験は翌年、二次試験の直前にあるが、これをしくじるとBacの受験資格を失い、大学に進学できない。国語はBacの試験の上から見ても命運を決する最重要科目なのだ。

実際にどんな問題が出るか、1例をあげよう： Ionescoはいう、“文学は人間が人間に無関心でいられなくなるものだ”と。これをどう思うか、はっきりとした例をとって、意見を述べよ。(下書きと清書用紙各1枚支給、2時間、清書のみ提出、Ionescoはフランスの劇作家)

国語から引き継いだ哲学では論理・感情・自由・正義・国家・生命・宇宙……など、人文・社会・自然の3科学にわたって論述・考察・反省が取り扱われる。高校卒業時のBac二次試験は国語以外の科目の試験だが、そのなかで哲学は文・理・技能3系受験者のうち前2系に必須科目。出題の1例をあげよう：合理性は科学的なもの以外には存在しないか。(文・理系共通、下書きと清書用紙各1枚支給、2時間、清書のみ提出)

フランスは、現在の世界での自国の政治的・文化的優位を今後も保つため、次世代・次々世代の指導者層・中堅層を最大限育成することが国家の最優先義務だと考えている。国語と哲学を重視する教育はそのために考え出された究極の人材養成方法なのだ。

ところで、日本では実利・実用主義的な発想から知能教育は大量の知識の羅列伝達という前半分の作業だけで終わり、習得した知識の分析・評価・整理・体系化・批判などいわゆる掘り下げという後半の知的作業の部分がない。ただ、それにしても日本は知識教育の水準が高く、それなりの成果を上げていることは確かだ。日本人の博識は定評があり、その知識と勤勉により日本は世界有数の先進国となった。

だが、今やそこに隠された欠陥が国を蝕んでいる。国民全体の思考力の低下だ。この問題は以前から指摘され、〈考える教育〉を訴える識者も多い。しかし、思考の単なる指導や誘導では実効がなく、具体的にどんな方法を採用すべきかについてまだ意見の集約を見ていない。この点について、フランスのように〈考え方の教育〉を導入して、体系的にもの考えるための思考方法を身につけさせることがこの問題を根本的に解決する鍵だ、と筆者は信じている。それは日本の歴史や風土に合った教材を用いてでもできるはずだ。

本稿は、白水社雑誌“ふらんす”、第85巻、第5号(2010年)5月号、4-5頁、掲載の文章を許可を得て転載、但しその一部を変更したものである。

「伝統的木造家屋と音の響き」



関西二期会ソプラノ・相愛大学講師 畑田弘美

畑田家住宅活用保存会では、この数年間にピアノ、ヴァイオリン、フルート、声楽などの演奏を、お楽しみ頂くクラシックコンサートを開催しました。どの奏者も畑田家の空間の響きに満足し、自身も楽しみながら、まるでコンサートホールで演奏しているように音楽を奏でていただきました。欧米の建築、とりわけ教会は天井の中心は非常に高く、大きく、全体は石造りで、最小限の音の鳴りで豊かに共鳴してくれます。まさしく音の響きを空間いっぱいに伝達させる条件が整っています。それに対して、日本家屋は音を吸収する素材が多い建物です。しかし、畑田家住宅は通常の日本家屋同様、木と紙と土などの素材を使用している伝統的な日本家屋でありながら、天井は高く、100年以上の歳月を経て堅くなった大きな柱、梁や鴨居などでできた木組み、室内の広い平面と外の広い庭など、美しい音楽を生み出す条件が揃っているのです。ガラス越しに見える広い庭は、奏者が視線を遠くに向けられるので、より広い空間をイメージできます。このような場で演奏を聴くことにより、聴衆も空気の共鳴を体感し、奏者の息づかいを聴き、美しいメロディーに心が動かされるのだと思います。奏者が空間いっぱいに音を運んでいるのですから、天井の空間から音を感じることもできますし、畳を伝わってくる音を感じることもできるのです。

欧米には屋外でコンサートができるホールが多数あります。その中の一つにボストン交響楽団による夏の一大イベント、タングルウッド音楽祭があります。1937年8月に始まった当時、タッパン家から寄贈された210エーカーにおよぶ広大な敷地には、ホールや施設が作られ、現在では毎年世界中から著名な音楽家と30万人ものファンが集う音楽フェスティバルとなっています。第一回目の音楽祭はテントの下で行われた為、雷雨によって中断されてしまいました。そこで野外コンサートホール「クーセヴィツキー・シェッド」が建設されました。ボストン響を代表する指揮者、クーセヴィツキーの名がついたこのホールは、現在も多くの人々が芝生でピクニック気分を満喫しながら、最高級の音楽を楽しむ、音楽祭の中心的な場所となっています。また1994年には小澤征爾の功績をたたえて「セイジ・オザワ・ホール」が建てられました。レンガ造りの外観がやさしい、この室内楽用ホールは、タングルウッドの自然に見事に溶け込んでいるのです。

この「自然に溶け込んでいる」という点は、畑田家住宅にも云えることだと思います。建物の中で演奏する他に、一度庭で歌ってみたことがありました。声が散ってしまうのではないかと懸念していたのですが、息の流れと共に出了る声は、周りの土塀を伝い庭の中央に響きが集まり、とても歌いやすい結果となったのです。

音を出すといっても、単に大きな音を出すのではなく、楽器や身体から離れた美しく響きのある音、もしくは声を出せば、まわりの自然もそれに共鳴して音楽と融合し素晴らしい瞬間を生み出すことができるのです。それにより、奏者も聴衆も充実感を味わうことが出来ます。そしてその音楽をより高く、より遠くへと伝達させる為にホールがあり、畑田家住宅はそのホールとなるのです。木は伐採した後もしも息づき、成長を続けて強く強くなるといえます。畑田家住宅を作っている木もいろいろな演奏と共鳴して、生長してくれるのが楽しみです。その喜びを、時間をかけて、沢山の方々と共有していきたいと思っています。

平成22年4月1日から平成23年3月31日までの収支決算

収入の部	
前年度繰越金	36,958
会費	541,000
寄付金・協力金	81,230
雑収入	7,200
合計	666,388

別途積立金合計	100,000
---------	---------

支出の部	
講師謝礼	164,500
資料・年報・出版作成費	214,380
通信費（郵送料、振替手数料等）	107,965
事務用品費	63,015
雑費（講師接待他）	74,605
次年度繰越金	41,923
合計	666,388

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 電話072-955-4380
会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いします。